

海員組合の元執行部・金森洋輔氏が講演③

自身の歩みを振り返りながら、日本の遠洋漁業と船員の歴史を語る
戦後の船員が日本の食を支えてきたことを伝えたい

7 月 12 日、広島県尾道市向島町の尾道市民センターむかいしま「こころ」で、向島公民館サークル「今を楽しもう会」の主催する講演会が開催され、元組合執行部の金森洋輔さんが『獲物を追って（遠洋トロール）激闘 海に生きた男の記録』をテーマに講演し、約 100 人が耳を傾けた。

金森洋輔さんは「私が伝えたいのは、自分の人生ではなく、戦後の船員がどれだけ日本の食を支えてきたかということです」と語り、遠洋漁業の歴史を紹介した。

当時の母船式漁業では、母船の中に加工工場を備え、漁獲したサケを船内で缶詰やイクラなどに加工する、当時としては最先端のシステムが構築されていた。また、一つの船団には 400 人を超える乗組員が参加し、出港時には函館の街全体が活気に包まれたという。当時の遠洋漁業が地域経済に大きな影響を与えていたことがうかがえる。

一方で、船員の仕事は常に危険と隣り合わせだった。冬の北洋では船体に着氷し、命懸けで氷を落とす作業が続く。マグロ船ではスクリューにロープが絡めば海へ飛び込み、ロープを切断する豪快な船員たちの姿も紹介された。

さらに講演では、1982 年（昭和 57 年）に発生した「第二十八あけぼの丸」の海難事故にも触れた。親しい仲間を失った経験を振り返り「生きていること自体が奇跡」と語る姿には、長年海と向き合ってきた船員ならではの重みを感じられた。

「海員だより」